

互いのよさを認め合い、 自己有用感を高める生徒の育成

—— 生徒が主体的に取り組める、組織的・計画的な学級活動を導く
「自己有用感パワーアップガイド」の作成と活用を通して ——

長期研修員 中澤 伸一

《研究の概要》

本研究は、中学校において、生徒同士が互いのよさを認め合い自己有用感を高めるために「自己有用感パワーアップガイド」を作成し、校内研修と学級活動において活用を図った。校内研修では、「自己有用感」や「認め合う場の設定」の重要性について教職員の共通理解を図った。学級活動では、「生徒による主体的な活動」と「認め合い活動」を実践した。これらの取組により、教職員が「認め合う場」を設定し、生徒が互いのよさを認め合うことで、生徒の自己有用感が高まることを実践を通して明らかにした。

キーワード 【生徒指導 自己有用感 主体的な活動 認め合い活動 学級活動】

群馬県総合教育センター

分類記号：F08-01 平成28年度 259集

I 主題設定の理由

文部科学省は、「生徒指導提要」(2010:1)で、「児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」ことが重要だと述べている。また、「自己実現とは(中略)、集団や社会の一員として認められていくことを前提とした概念」とし、「どの児童生徒にも一定水準の共通した能力が形成されるような計画的な生徒指導」を求めている。加えて、「互いに協力し合い、よりよい人間関係を主体的に形成していこうとする人間関係づくり」は、生徒指導の重要な目標の一つであるとした上で、「生徒指導を進めるに当たっては、全教職員の共通理解を図り、学校としての協力体制・指導体制を築くことは欠くことのできない大切なこと」と協働体制の構築を求めている。

国立教育政策研究所の「いじめに備える基礎知識」(2015:9)では、「授業や行事の中で、子供自らが主体的に物事に取り組み、その中で互いのことを認め合ったり、心のつながりを感じたりできるためには、全ての子供が活躍できるような場面を意識的に作っていく必要があります」と述べている。さらに、児童生徒のあるべき姿を「きちんと授業に参加し、基礎的な学力を身につけ、認められているという実感を持った子供」と示しており、「規律・学力・自己有用感」の育成を強く求めている。

自己有用感とは、国立教育政策研究所の「生徒指導リーフ」(2015:2)によれば、「自分と他者(集団や社会)との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価」であり、他者との関係性の中から生まれる価値観であることを強調している。

群馬県は、「第2期教育振興基本計画」(2014)の基本施策3において、「自他を大切にす心や自己肯定感を育み、規範意識を高める」ことと、「いじめ防止に努め、良好な人間関係を築く力を育成する」ことを取組の柱に掲げている。

研究協力校の実態に注目してみると、2016年5月に実施した実態調査によると、自己肯定感に関する質問に肯定的な回答をした生徒の割合は全校で86%であった。また、他者からの受容感に関する値は82%、責任感に関する値は93%と高い数値を示していた。しかし、「人の役に立ちたい」(他者貢献意識)と答えた生徒は全校で96%だったのに対し、「自分は、人の役に立っている」(自己有用感)と答えた生徒は55%であった。これは、自分が他者貢献したいと考えているが、他者から肯定的な評価を得られていないと感じている生徒が多いためだと考えられる。また、学校生活に不安を感じる生徒も少数ではあるが、見受けられた。こうした課題の背景には、生徒自身が持っている、自分や他人の様々なよさを、振り返る時間や互いに認め合う機会が少ないことがあると考えられる。

教職員への聞き取り調査では、「生徒に自信をもって活躍してもらいたい」「いじめについて、教職員の共通理解を図りたい」「組織的に学級活動を進めていきたい。また、簡単に使える資料が欲しい」といった声も聞かれた。

そこで、学級活動の場面において、「自己有用感パワーアップガイド」の作成と活用を通して、生徒同士による自分や他人のよさを認め合う時間を充実させたいと考えた。互いのよさを認め合う学級集団を形成し、生徒の自己有用感を高めることは、いじめや不登校の未然防止だけでなく、生徒が安心して生活できる居場所づくりにもつながる。教職員が、「自己有用感」や「互いを認め合う場の設定」の重要性についての共通理解を図り、学校として協働体制を構築しながら、生徒が主体的に取り組む学級活動の実践を学校全体で進めていくことが重要であり、「自己有用感パワーアップガイド」を校内研修や学級活動において活用することで、生徒が互いのよさを認め合い、自己有用感を高められると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

中学校の学級活動において、生徒が主体的に取り組める、組織的・計画的な学級活動を導く「自己有用感パワーアップガイド」の作成と活用を通して、生徒が互いのよさを認め合うことにより、自己有用感を高めることを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の内容

1 基本的な考え方



図1 研究構想図

(1) 「自己有用感」について

「自己有用感」とは、「生徒指導リーフ いじめのない学校づくり」(2013:12)では、「相手からの好意的な反応や評価があって感じることでできる自己の有用性」と記載されている。自己の有用性とは、「自分が人の役に立っていると実感すること」である。また、「単に『クラスで一番足が速い』という自信ではなく、『クラスで一番足が速いので、クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるように頑張りたい』という形の自信」と続いている。「自己肯定感」や「自尊感情」と違い、人と関わることの喜びや大切さに気付いていくこと、相手との関わりがなければ、生まれてこないという点が、この感情のポイントである。自分の役割や責任を果たし他人から認め

られることで、この感情は高まっていく。これは、自分が社会の一員であることを自覚することでもあり、規範意識の醸成につながっていくと考えられる。また、自己有用感の育成は、いじめに向かう生徒のストレスを生まれにくくするなど、生徒指導上の諸問題の未然防止の観点からも大変重要である。

生徒の自己有用感を高めるためには、共感的な人間関係の中で、自己決定や集団決定をし、自分や他人を理解・受容する場を計画的に設けることが必要である。そこで、「自己有用感パワーアップガイド」を活用し、自分のよさを学級に生かしていく場を設定し、他者から認められ、信じられ、頼られる経験を通して、生徒の「自己有用感」を高めていきたいと考える。

(2) 「互いのよさを認め合う」について

「生徒指導提要」(2010:2)では、「自他の個性を尊重し、互いの身になって考え、相手のよさを見付けようと努める集団、互いに協力し合い、よりよい人間関係を主体的に形成していこうとする人間関係づくり」は生徒指導の充実の基盤であるとしている。望ましい人間関係づくりを進めていくためには、自己を肯定的に捉えるとともに、相手のよさを認めていくことが必要である。自己有用感とは、人と人が一緒に活動することを通して自らが感じ取っていくものであり、教職員にとって重要なのは、そのための「場づくり」である。本研究では、「すべての生徒、みんなが認められる場」として、「応援、称賛、感謝」の場面を設定した。「応援、称賛、感謝」の場面であれば、物事の結果を気にすることなく、すべての生徒がそれぞれの頑張りを認め合うことができる。学級活動の振り返りの場面において、自己決定や集団決定したことに対する「応援」、結果ではなく取組に対する「称賛」、みんなのために活動してくれた仲間への「感謝」など、すべての生徒が認められる場面を意識的に設定し、生徒の互いのよさを認める態度を養いたい。また、認め合うことによって、さらに他者貢献したいという意識の向上につなげていきたいと考える。

(3) 「生徒が主体的に取り組む学級活動」について

「生徒指導提要」(2010:6)では、生徒指導の三つの視点(①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること)に留意し、「児童生徒が互いの考えを交流し、互いのよさに学び合う場を工夫した指導、一人一人の児童生徒が主体的に学ぶことができるよう課題の設定や学び方について自ら選択する場を工夫した指導」といった学習指導の必要性が一層増していると述べている。

学級活動の中で、計画委員の生徒と共に話し合い活動の議題や方法について考え、決定する場を設けたり、話し合い活動の中で、生徒が自分の役割を持ち自分の責任を果たす場を設けたりすることによって、生徒自らが自分や自分たちのことについて考え、生徒全員で作りに上げていく学級活動を実践していきたいと考える。

(4) 「組織的・計画的な学級活動」について

「生徒指導提要」(2010:50)では、「小学校3年生から中学校3年生にかけて、学年が上がるにつれて全体的な自己評価が低下すること」が挙げられている。このような中で、生徒の発達段階に応じて自己有用感を高めていくためには、学校全体での、組織的・計画的な学級活動への取組が必要である。校内研修で、「自己有用感パワーアップガイド(第1章 互いに認め合える授業づくりに向けて)」を活用し、「自己有用感」を高めることや「認め合う場の設定」の重要性について共通理解を図りたい。また、全教職員が意識を同じ方向に向けて、「居場所づくり」と「絆づくり」の指導・支援を進めていきたいと考える。また、「自己有用感パワーアップガイド(第2章 3年間を見通した学級活動計画表)と(第4章 チームになろうシート)」の活用を図ることで、計画的に学級活動の実践を進めていきたい。各学年、各学級で、担任、副担任、すべての教職員が、それぞれの役割を意識し、チームで指導・支援を行っていきたいと考える。

2 教材の概要

(1) 「自己有用感パワーアップガイド」について

校内研修資料「第1章 互いに認め合える授業づくりに向けて」「第2章 3年間を見通した学

級活動計画表」、学級活動資料「第3章 話し合いの仕方ガイドブック」「第4章 チームになろうシート」「第5章 コミュニケーションスキルの向上シート」から構成される、ガイドブックである(表1)。

第1章と第2章は、教職員による、生徒の「居場所づくり」のための資料である。

第1章は、国立教育政策研究所から発行されている「生徒指導リーフ」や「学級・学校文化を創る特別活動 中学校編」などを参考にし、重要な情報を整理し、ガイドブックとしてまとめたものである。「自己有用感」や「認め合う場の設定」、「いじめの未然防止」について、教職員の理解を深め、生徒指導や学級活動の指導における共通理解を図ることを目的としている。また、生徒による「主体的な学級活動」を展開するために、計画委員と授業構成を一緒に考えるワークシートの活用方法や「互いに認め合う場」を設定する方法なども掲載されている。

第2章は、陸上記録会や合唱コンクールといった学校行事などの学年、学期ごとの学級活動例、単元名一覧表である(表2)。電子データ版では、ワークシートにリンクしており、クリックするとワークシートがパソコンの画面上に現れる。この教材により、授業に必要なワークシートを素早く簡単に準備することができる。また、この教材を活用することで、全教職員が、組織的・計画的に指導を行うことができる。

第3章からは、生徒による「絆づくり」のための、学級活動における活用資料集である。第3章は、「教員研修センター」の「教員研修の手引き」などを参考にし、話し合いの仕方をまとめたものである。「ジグソー法」や「ワールドカフェ」などの「話し合いの流れ」や、付箋紙やホワイトボード、ワークシートなどを使った、「アイデアを出す方法」や「アイデアをまとめる方法」など、生徒による主体的な活動を導き出す、話し合いの方法が掲載されている。この教材を使って計画委員の生徒と自分たちのクラスに合った授業構成について一緒に考えることができる(図2)。

第4章の「チームになろうシート」は、「学校行事」などをテーマにした、学級活動で使えるワ

表1 「自己有用感パワーアップガイド」 内容項目一覧表

| 章 | 対象 | 活用の目的・場面 | 項目 | ページ |
|-----|--------------------|------------------------|---|---|
| 第1章 | 互いに認め合う授業づくりに向けて | 教職員の共通理解・校内研修 | 1. 互いに認め合う授業づくりに向けて 2. 話し合い活動の基本的な活動過程 3. 学級活動で自己有用感を高める手立て(話し合い、認め合い、高め合い) | 1~6 8~24 |
| 第2章 | 3年間を見通した学級活動計画表 | 学級活動の指導計画 | ○3年間を見通した学級活動計画表 | 25 |
| 第3章 | 話し合いの仕方ガイドブック | 学級活動の授業構成・学級活動、休み時間など | 1. 「話し合いの流れ」について 2. アイデアを出す方法(発散の仕方) 3. アイデアをまとめる方法(収束の仕方) 4. 「話し合いの人数」について 5. 授業デザインの仕方 | 26~28 29~34 35~42 43 44~48 |
| 第4章 | チームになろうシート | 自己有用感の育成、いじめの未然防止・学級活動 | ○学校行事・学級活動 1. 自己理解・他者理解①、②、③ 2. 陸上記録会 3. 合唱コンクール 4. 進路学習①、②、③ 5. 来年度に向けて①、②、③ ○生徒指導 6. 携帯電話の使い方①、②、③ 7. いじめの未然防止①、②、③ | 49~55 56~64 65~73 74~77 78~84 85~89 90~98 99~102 |
| 第5章 | コミュニケーションスキルの向上シート | コミュニケーションスキルの向上・学級活動 | 1. アイスブレイク 2. ソーシャルスキル①、②、③、④ 3. アサーション①、②、③ 4. エンカウンター①、②、③、④ 5. アンガーマネジメント①、②、③ | 103~108 109~111 112~120 121~126 |

表2 電子データ版 内容項目一覧表

| 章 | 内容項目 |
|-----|--|
| 第1章 | 互いに認め合う授業づくりに向けて 互いに認め合う授業づくりに向けて 話し合い活動の基本的な活動過程 学級活動で自己有用感を高める手立て |
| 第2章 | 3年間を見通した学級活動計画表 学期 1学期 2学期 3学期 学校行事・学級活動 生徒指導 学校行事・学級活動 生徒指導 学級活動 3年 自己理解他者理解 陸上記録会 携帯電話の使い方 合唱コンクール 進路学習 いじめ防止 陸上の手紙 2年 自己理解他者理解 陸上記録会 携帯電話の使い方 合唱コンクール 進路学習 いじめ防止 3年生に向けて 1年 自己理解他者理解 陸上記録会 携帯電話の使い方 合唱コンクール 進路学習 いじめ防止 2年生に向けて |
| 第3章 | 計画委員と一緒に考える「話し合いの仕方」ガイドブック 話し合いの流れ アイデアを出す方法 アイデアをまとめる方法 話し合いの人数 授業デザインの仕方 |
| 第4章 | 「学級活動」ワークシート(「チームになろう」シート) |
| 第5章 | 「コミュニケーションスキルの向上」ワークシート アイスブレイク ソーシャルスキル アサーション エンカウンター アンガーマネジメント |

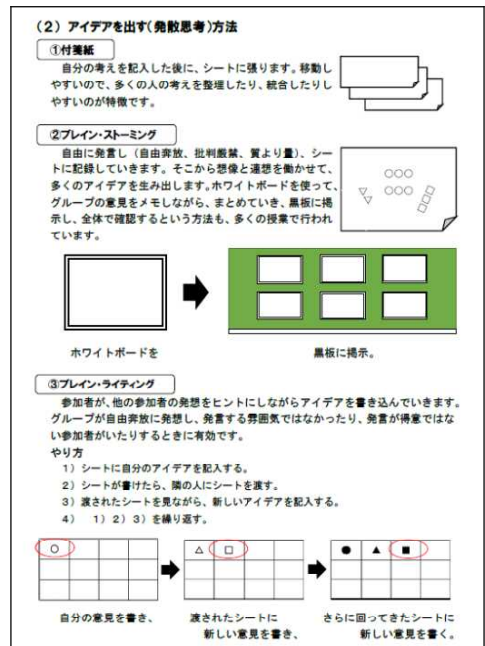


図2 話し合いの仕方ガイドブック

ークシート集である（図3）。生徒同士と一緒に活動することを通して、自己理解・他者理解を深めるシートや、陸上記録会や合唱コンクールなどの行事において、自己決定・集団決定した内容を可視化し、マークを互いに張り合ったり手紙を交換したりして、他者から認められる活動を盛り込んだシートから構成されている。学校生活の中で、こういった場面を意識的に設けることにより、生徒の自己有用感を高めることを目的としている。ワークシートの流れが、各学年とも、共通した構成になっており、生徒が見通しをもって学習に取り組みやすいようになっている。また、生徒が話し合いの方法を選択できるようになっている。

第5章は、「話し合い活動」や「認め合い活動」の土台となる、コミュニケーションスキルの向上を目的としたワークシート集である。「構成的グループエンカウンター」などに関する文献を参考にして作成した。これらについての授業を実施し、コミュニケーションスキルが向上すれば、学級活動における「話し合い」や「認め合い」も、効果的に行えると考える。

(2) 実態調査の結果と考察

2016年5月に、研究協力校で実施したアンケート調査によると、「自分を大切に思っている」という問いに肯定的な回答をした生徒は全校で86%、「人から受け入れられていると思う」という問いには82%、「係や委員会など、責任を持って自分の仕事に取り組んでいる」という問いには93%の生徒が肯定的な回答をした。この結果から、生徒は「自己肯定感」や「他者からの受容感」「責任感」は、高いということがわかった。

次に、「人の役に立ちたいと思う」という問いに肯定的な回答をした生徒は、1年生が96%、2年生が93%、3年生が99%、全校では96%であった（図4）。学年間での数値のばらつきは見られず、全校として同じ傾向があることがわかった。

これまでの問いに対して、肯定的な回答をする生徒が多かったのに対して、「人の役に立っていると思う」という問いに肯定的な回答をした生徒は、1年生が59%、2年生が48%、3年生が55%、全校では、54%であった（図5）。この回答に関しても、全校で同じ傾向が見られた。

以上の結果から、生徒は「他者貢献意識」は高く、「責任感」を持ち、自分の仕事に取り組む、自分の役割を果たしていると考えられる。しかし、それらの活動に対して、他者から認められる経験が少ないために、他者から受け入れられているという実感が持てず、自己有用感が十分に高められていないと考えられる。

これらの結果から、校内研修において、「自己有用感パワーアップガイド」の「第1章 互いに認め合う授業づくりに向けて」「第2章 3年間を見通した学級活動計画表」を活用して、教職員の「自己有用感」の理解、「認め合う場の設定」の重要性、「いじめ、不登校の未然防止」について共通理解を図り、生徒の自己有用感を高める活動を導きたいと考えた。また、学級活動において、「自己有用感パワーアップガイド」の「第3章 話し合いの仕方ガイドブック」「第4章 チームになろうシート」を活用して、学校行事に関する自己決定や集団決定を計画的に行い、それを可視化し、互いを認め合う場面を意図的に作り出すことによって、生徒の自己有用感を高めたいと考えた。



図3 チームになろうシート

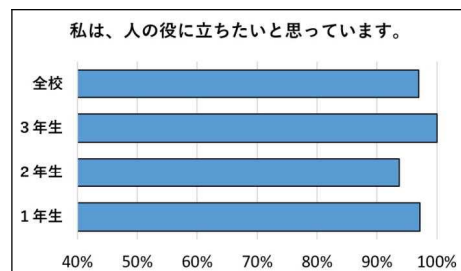


図4 生徒の他者貢献意識

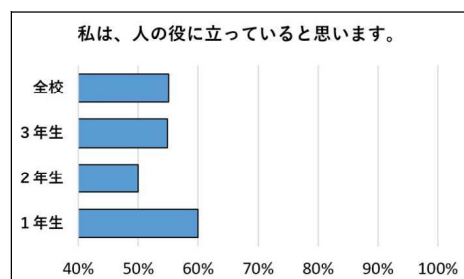


図5 生徒の自己有用感

IV 研究の計画と方法

1 実践の概要

生徒が互いのよさを認め合い、自己有用感を高められるように、「自己有用感パワーアップガイド」を校内研修と学級活動の2つの場面で活用した。

(1) 「第1章 互いに認め合う授業づくりに向けて」

「第2章 3年間を見通した学級活動計画表」を活用した校内研修の実践

| | | |
|-------|--|-------------|
| 対 象 | 研究協力校教職員 | 「パワーアップガイド」 |
| 実 践 日 | 平成28年10月17日 | 対応ページ |
| 研 修 名 | 互いのよさを認め合い、自己有用感を高める生徒の育成 | 第1章 P.1～24 |
| ね ら い | 「自己有用感」、「認め合う場の設定」の重要性、「いじめ未然防止」について教職員の共通理解を図り、生徒の自己有用感を高める活動場面について考えられる。 | 第2章 P.25 |

(2)－① 「第3章 話合いの仕方ガイドブック」

「第4章 チームになろうシート（合唱コンクール）」を活用した授業実践

| | | | |
|------|-----------------|------|-------------|
| 対 象 | 中学1・2・3年生（108名） | 実践期間 | 平成28年9月～11月 |
| 活動時間 | 学級活動・文化的行事 | 指導者 | クラス担任・長期研修員 |

合唱コンクールに向けた学級活動（第3学年） 指導計画

| 過程 | 題 材 名 | ね ら い | 「パワーアップガイド」 対応ページ |
|----------|--------------------------------------|--|--|
| 1 | 合唱コンクールでチームになろう！ ～友達に応援メッセージを送ろう～ | (自己決定と認め合い活動) ・合唱コンクールに向けての個人目標を設定し、互いに肯定的な言葉を掛け、認め合う活動（応援）ができる。 | 第1章 P.14～15 第4章 P.65 |
| 休み 時間 | 合唱コンクールでチームになろう！ ～話合いの準備をしよう～ | (生徒による主体的な学級活動のための準備) ・合唱コンクールに向けた、学級活動の話合いの準備を計画委員と行い、そのクラスに合った話合いの方法を選択できる。 | 第1章 P.9～13 第3章 P.26～48 第4章 P.66～72 |
| 2 | 合唱コンクールでチームになろう！ ～クラスのスローガンを作ろう～ | (生徒による主体的な学級活動、集団討議から集団決定) ・合唱コンクールに向けたスローガンを、計画委員が中心となって学級で話合い、決定できる。 | 第1章 P.16～18 第4章 P.66～70 |
| 3 | 合唱コンクールでチームになろう！ ～みんなで作戦を立てよう～ | (生徒による主体的な学級活動、集団討議から集団決定) ・合唱コンクールに向けて、グループで学級の練習を振り返り、課題や修正点を補う作戦を生徒が主体的に話し合える。 | 第1章 P.19～22 第4章 P.71～72 |
| 4 | 合唱コンクールでチームになろう！ ～みんなで歌おう～ | (自己決定、集団決定した目標に向けての実践) ・目標に向かって、合唱できる。 | |
| 5 | 合唱コンクールでチームになろう！ ～みんなの頑張りを認め合おう～ | (個人と集団の振り返りと認め合い活動) ・合唱コンクールにおいて、自己決定、集団決定した目標が実践できたか振り返り、互いを認め合う活動（称賛、感謝）ができる。 | 第1章 P.23～24 第4章 P.73 |

(2)－② 「第4章 チームになろうシート（いじめ未然防止）」を活用した授業実践

| | | | |
|------|------------|------|-------------|
| 対 象 | 中学1年生（34名） | 実践期間 | 平成28年12月 |
| 活動時間 | 学級活動 | 指導者 | クラス担任・長期研修員 |

いじめ未然防止に向けた学級活動（第1学年） 指導計画

| 過程 | 題 材 名 | ね ら い | 「パワーアップガイド」 対応ページ |
|----|----------------|--|--------------------------|
| 1 | いじめを無くすチームになろう | (生徒による主体的な学級活動、集団討議から集団決定) ・いじめの「定義」と「構造」を理解し、いじめ未然防止のために、自分たちでできることを考えられる。 | 第1章 P.1～7 第4章 P.90～91 |

| | | | |
|---|-------------------------------------|--|--------------------------|
| 2 | いじめを無くすチームになろう ～ストレス対処法について考えよう～ | (生徒による主体的な学級活動、集団討議から集団決定) ・ストレスについて理解し、ストレス対処法について考えられる。 | 第1章 P.1～7 第4章 P.92～94 |
|---|-------------------------------------|--|--------------------------|

2 検証計画

| 検証の視点 | 検証の方法 |
|---|--|
| 1. 校内研修における「自己有用感パワーアップガイド（第1章 互いに認め合う授業づくりに向けて）（第2章 3年間を見通した学級活動計画表）」の活用は、「自己有用感」、「認め合う場の設定」の重要性、「いじめ未然防止」について教職員の共通理解を図り、生徒の「互いのよさを認め合う場」を意図的に設定しようとする教職員の意識を高めるための有効な手立てとなったか。 | <ul style="list-style-type: none"> ・教職員へのアンケート調査 ・教職員への聞き取り調査 |
| 2. 学級活動における「自己有用感パワーアップガイド（第3章 話し合いの仕方ガイドブック）（第4章 チームになろうシート）」の活用と、「生徒による主体的な活動」「認め合い活動」の実践は、「生徒が互いのよさを認め合い、自己有用感を高める」ための有効な手立てとなったか。 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の活動の様子 ・ワークシートへの記述 ・アンケート調査 ・教職員への聞き取り調査 |

3 実践


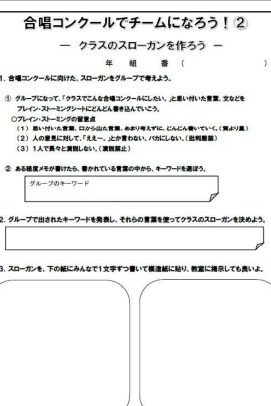


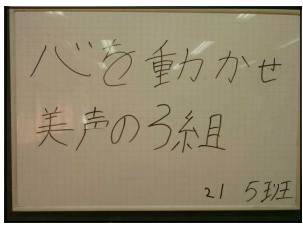
(1) 「第1章 互いに認め合う授業づくりに向けて」

「第2章 3年間を見通した学級活動計画表」を活用した校内研修の実践

| プレゼンテーション資料 | 主な活動と教職員の様子 |
|--|---|
| <p>本時のねらい</p> <p>「自己有用感」、「認め合う場の設定」の重要性、「いじめの未然防止」について教職員の共通理解を図り、生徒の自己有用感を高める活動場面について考えられる。</p> <p>例えば、</p> <p>「自己有用感」の理解</p> <p>考えてみましょう！</p> <p>2～3人組で、互いのよさを認め合える、どんな場面、取組があるか、話合ってください。</p> <p>① 例えば、朝の会、給食、清掃、帰りの会では？</p> <p>② 例えば、授業中では？ 行事では？ 部活動では？</p> <p>「認め合う場の設定」について</p> <p>いじめの構造</p> <p>いじめの構造</p> | <p>○ 生徒の実態を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自己肯定感」は高いが、「自己有用感」が低い。 ○ 「自己有用感」について理解する。 ・他者からの肯定的な声掛けが重要であることを理解する。 <p>「応援」「称賛」「感謝」など</p> <p>○ 「認め合う場の設定」の重要性について理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝の会や委員会活動の中で、「互いを認め合う場」は設定できないか、グループになり話し合い、全体で共有する。 <p>校内研修の様子</p> <p>○ 「いじめの構造」について理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」などのいじめの4層構造について理解する。 ・「加害者」を生みだすストレスと「自己有用感」との関係や、「仲裁者」や「相談者」について理解する。 |

(2) - ① 「第3章 話し合いの仕方ガイドブック」

「第4章 チームになろうシート（合唱コンクール）」を活用した授業実践

| 過程 | チームになろうシート | 主な学習活動と生徒の様子 | 教師の気付き |
|------|---|--|--|
| 1 | <p>本時のねらい（自己決定と認め合い活動） 合唱コンクールに向けての個人目標を設定し、互いに肯定的な言葉を掛け、認め合う活動ができる。</p> <p>合唱コンクールでチームになろう！① — 友達に応援メッセージを送ろう —</p> <p>年 組 番 ()</p> <p>1. 自分の力を、どのクラスに活かしていくか考え、下の図の丸い吹き出しにセリフを書こう。 例 → 大きな声で歌う。 パートリーダーになって、音程を正確にとる。</p> <p>2. 友達の良いところを見つけて、下の図の丸い吹き出しにメッセージを書こう。 （4人グループで、順番に1枚ずつ書いて、友達に送るメッセージを作る。） その他にも友達が頑張っていることがあったら、褒める。 例 → ○○さん、歌が上手だから、自信を持って歌ってね。 ○○さん、いつもみんなのことを考えてくれて、ありがとう。 など</p> <p>3. 下の図を切って横並びに貼り、教室に掲示しよう。</p>  <p>本時で使用したワークシート</p> | <p>○合唱コンクールに向けて、自分の力をクラスにどう生かしていくか考え、個人目標をシートに記入する。</p> <p>○4人グループで、友達の個人目標に応援メッセージを贈る。</p> <p>生徒が書いたワークシート</p> <p>●●君は、音楽の時、しっかり声が出せているから、○○君ならできるよ！（生徒Aに対する応援メッセージ）</p>  | <p>・授業後、クラスの生徒が、「合唱コンクールの練習をやりたい。」と言ってきました。</p> |
| 休み時間 | <p>本時のねらい（生徒による主体的な学級活動のための準備） 合唱コンクールに向けた、学級活動の話し合いの準備を計画委員と行い、そのクラスに合った話し合いの方法を選択できる。</p> <p>話し合い 司会カード</p> <p>①今日は、「合唱コンクールでチームになる」ために「1年3組の合唱コンクールスローガン」について話し合います。</p> <p>②今日の流れですが、 ・最初に、「4人グループ」で、スローガンについての「班の意見」をまとめてもらいます。 例えば、「みんなが大事！チーム3組！」などです。 ・次に、「班で出した意見」を発表してもらいます。 「12時15分からです。」 ・最後に、「みんな」で、「班で出した意見」を選んだり、修正したりしながら、「クラスのスローガン」にまとめていきたいと思いませんか？ 何か質問はありますか？</p> <p>生徒と作成した司会カード</p> | <p>○計画委員の生徒と、「話し合い授業デザインシート」を使い、自分たちのクラスに合った、学級活動の話し合いの「議題」「方法」「進行方法」について考え、決定する。</p> <p><計画委員の生徒からの提案></p> <p>議題 クラスのスローガンを作りたい。</p> <p>方法 「ホワイトボードを使った話し合い」が良いと思います。</p> <p>進行方法 グループでの話し合いの後、全体で決めていけば良いと思います。</p> | <p>・生徒が役割を持ち、実際の場面を想定することで、自分たちで考える活動へとつながった。</p> |
| 2 | <p>本時のねらい（生徒による主体的な学級活動、集団討議から集団決定） 合唱コンクールに向けたスローガンを、計画委員が中心となって学級で話し合い、決定できる。</p> <p>合唱コンクールでチームになろう！② — クラスのスローガンを作ろう —</p> <p>年 組 番 ()</p> <p>1. 合唱コンクールに向けた、スローガングループで考えよう。 ① グループにおいて、「クラスでどんな合唱コンクールにしたい」と思い描いた言葉、文などをブレインストーミングで出し合い、みんなの意見から選んでいく。 ② スローガンの作成作業 (1) 思い描いた言葉、口から出る言葉、決められた文、どんな言葉でいいか。(見出し欄) (2) 人の意見に対して「ええー、おもしろいなー、いいねー」などいっていい言葉を探そう。 (3) 1人で書くのではなく、話し合いながら、言葉を探そう。 ③ みんなの意見がまとまったら、選んでいる言葉の中から、キーワードを選ぼう。 グループのキーワード</p> <p>2. グループで出されたキーワードを整理し、それらの言葉を使ってクラスのスローガンを決めよう。</p> <p>3. スローガンを、下の紙にみんなで1文字ずつ書いて横並びに貼り、教室に掲示してもいいよ。</p>  <p>本時で使用したワークシート</p> | <p>○司会の生徒が、「議題」「提案理由」「話し合いの方法」を確認する。</p> <p>○グループでの話し合いの結果を、どのようにまとめていくのか、全体で確認し、スローガンにまとめていく。</p> <p>4人グループでの話し合いの様子</p> <p>クラス全体での話し合いの様子</p> <p>生徒が書いたホワイトボード</p>    | <p>・計画委員の生徒が中心となって、単なる多数決で結果が決まるのではなく、いろいろな考えを合わせながら、スローガンが決まっていた。生徒が、自分たちで進めていく感じが良かった。</p> |

| 過程 | チームになろうシート | 主な学習活動と生徒の様子 | 教師の気付き |
|----|---|---|---|
| 3 | <p>本時のねらい（生徒による主体的な学級活動、集団討議から集団決定）</p> <p>合唱コンクールに向けて、前半グループで練習の良い点と改善点を、後半グループで改善点を克服する方法を、生徒が主体的に話し合える。</p> <p>合唱コンクールでチームになろう！③ — みんなで作戦を立てよう —</p> <p>年 組 番 ()</p> <p>1. 合唱コンクールで、みんなの力を合わせるために、話し合いをして、作戦を立てよう。 2. 自分たちの練習の様子を動画で見よう。 3. 自分たちの、良かった点や、改善点の良いところを2グループに分けて話し合おう。 話し合い</p> <p>パートごとのグループになって、付箋紙のワークシートを使い、話し合いしよう。</p> <p>話し合いが終わったら、パートごとの新しいグループを作りましょう。</p> <p>話し合い</p> <p>話し合いが終わったら、みんなでイメージする、すばらしい合唱ができるように、グループで話し合い、作戦を立てよう。</p> <p>話し合いが終わったら、作戦が、これまでに出た意見を全体に発表しよう。</p> <p>4. グループで話し合った意見を、全体で確認しよう。</p> <p>5. みんなで立てた作戦を、クラスに発表しよう。そして、実行しよう。</p> <p>○年 組 合唱コンクール(大人数)</p> <p>その1 合唱練習</p> <p>その2 他のクラスと対戦をする</p> <p>その3 みんなでアドバイスしよう</p> <p>本時で使用したワークシート</p> <p>話し合い 司会カード</p> <p>10月8日(木) 3年3組 (学級活動)</p> <p>①今日は、提案理由</p> <p>「クラスの合唱をより良く(すばらしく)する」ために「合唱コンクールの練習方法(作戦)」について話し合います。</p> <p>議題 話し合いの「方法」と流れ</p> <p>②今日の流れですが、</p> <p>・最初に「パートごとのグループ」で、「歌の良かった点、改善点」について、「話し合い、発表」を行います。「15分間の分までです。」</p> <p>次に、「新しいグループ」になります。</p> <p>そして、話し合いの結果、歌の良かった点、改善点を報告します。それも同じ「改善点を克服するための練習方法(作戦)」について「話し合い、発表」を行います。「15分間の分までです。」</p> <p>最後に、「みんな」で、「立てた意見」を確認します。</p> <p>③先生、何かお話しありますか？ 何か質問はありますか？</p> <p>※それでは、始めて下さい。～ 話し合いが終わったら～</p> <p>※みんなで作戦したこと、確認します。「○ ○ ○ ○ ○」</p> <p>④先生、何かお話しありますか？</p> <p>⑤みんなで作戦したこと、みんなで作戦できるようにしていきたいと思っております。</p> <p>本時の司会カード</p> | <p>○自分たちの合唱の様子を、ビデオで見て、確認する。</p> <p>○パートごとのグループ（前半グループ）で、歌の良い点、改善点について話し合う。</p> <p>前半グループでの付箋紙を使った話し合い。</p> <p>話し合いの様子</p> <p>各グループをアドバイスする主体的な取組を見せる生徒</p> <p>生徒が書いた付箋紙</p> <p>○新しいグループ（後半グループ）で、前半グループで話し合った内容（歌の良い点、改善点）を報告し合い、改善点を克服する方法について話し合う。</p> <p>後半グループでのホワイトボードを使った話し合い。</p> <p>本時の話し合いの全体での確認</p> <p>○後半グループで話し合った内容（改善点を克服する方法）を確認する。</p> <p>・ワークシートに授業の流れが書いてあるので、初めての話し合いの形だったが、生徒が見通しを持って、授業に臨めた。</p> <p>・すべてのグループに、合唱のアドバイスをして回る生徒が現れるなど、意欲的に活動する生徒の姿が目立った。</p> <p>・歌の最後の和音だけ、4部合唱にする。 ・練習の時、集中できるように、クラスのドアの窓に幕を付ける。 ・他のクラスと歌い合う。</p> | |
| 練習 | <p>本時のねらい（生徒による主体的な練習）</p> <p>自分たちで考えた作戦を実行し、互いのよさを認め合える。</p> <p>練習後に発表された生徒の意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌う姿勢や、口の開け方、表情など、表現力がすばらしかった。 ・先輩のクラスの合唱が聞けて、良かった。 ・今日、自分のクラスの朝の練習は全然声が出ていなかった。今日の練習で声が出せたのは、君たちの歌声を聞いたおかげです。ありがとう。 | <p>2クラスによる合同の歌練習</p> | |
| 4 | <p>本時のねらい（自己決定、集団決定した目標に向けての実践、生徒による主体的な合唱）</p> <p>今までの取組を踏まえて、互いを認め合えるすばらしい合唱を歌うことができる。</p> <p>クラスの掲示物</p> | <p>合唱前のクラスの輪</p> <p>合唱本番</p> | <p>・生徒が、自分たちで、掲示物を張り替えたり、意識を高めたりしていた。</p> |

V 研究の結果と考察

1 校内研修における「自己有用感パワーアップガイド（第1章 互いに認め合う授業づくりに向け）（第2章 3年間を見通した学級活動計画表）」の活用について

(1) アンケート調査から

「自己有用感」と「認め合う場の設定の重要性」について教職員の共通理解を図るために、校内研修を行った。

研修終了後に行った教職員のアンケート調査では、「自己有用感の意味」「認め合う場の設定の重要性」について、「非常に理解できた」「理解できた」と全教職員が答えた。

また、「生徒の自己有用感を高めるために、『認め合う場の設定』をこれまで意識的に行ってきた」という質問に対し、「非常にそう思う」と答えた教職員は4%であった（図6-1）が、研修終了後、『認め合う場の設定』を、これから意識的に実践していきたい」という質問に対し、「非常にそう思う」と答えた教職員は76%、「わりにそう思う」と答えた教職員は24%と、全教職員の意識の向上が見られた（図6-2）。

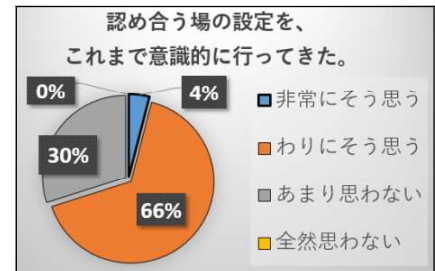


図6-1 教職員の意識の変容



図6-2 教職員の意識の変容

(2) 研修中と研修後の教職員の活動から

研修中に、生徒の互いのよさを見つける活動について教職員同士で話し合い活動を行った。「帰りの会で日直が、『明日の日直の良いところ』を発表し、次々につなげていく」「クラスに『いいねボックス』を設置し、友達の良いところを書いて入れ、1週間ごとに発表する」など、情報交換が活発になされ、「自分のクラスでも実践したい」という教職員が多数いた。

研修終了後には、「授業の中だけではなく、部活動においても、ミーティングで互いのよさを認める活動を行っていききたい」といった言葉も聞かれた。

また、合唱コンクール後の、生活ノートへの担任からのコメントの中に、「〇〇君の貢献度も高かったよ。練習の時間が作れるように、配布の仕事を頑張ってくれたね」「みんなの歌の練習のために、配膳台の上の食器を進んで片付けてくれてありがとう」といったものがあつた。これは、教職員の「生徒の自己有用感を高めること」についての意識の高揚の結果だと考える。さらに、行事終了後に、「友達に感謝の手紙を書く」「自己決定した目標をクラスで掲示し認め合う」などの取組が、全校で増加した。

以上の(1)(2)から、校内研修における「自己有用感パワーアップガイド」の活用は、教職員の「自己有用感」や「認め合う場の設定の重要性」についての共通理解を図り、「互いのよさを認め合う場」を意図的に設定しようとする教職員の意識を高めるための有効な手立てとなったと考える。

2 学級活動における「自己有用感パワーアップガイド（第3章 話し合いの仕方ガイドブック）（第4章 チームになろうシート）」の活用について

(1) 合唱コンクールに向けた授業から

まず、生徒による主体的な学級活動となるために、「計画委員を組織し、教師と共に授業構成を考える」「前半グループと後半グループによる、2段階の話し合い活動を行う」などの取組を行った。

計画委員の活動では、教師と生徒と一緒に話し合いの流れを確認することにより、自分たちのクラスに合った話し合いの方法を選ぶことができた。司会の生徒も話し合いの流れをあらかじめイメージすることができ、台本を読むのではなく自分の言葉で話し合いを進めることができた。司会の生徒からは授業後に、「仕事を任せられているみたいで、うれしかった」といった感想を聞くことができた。

前半グループと後半グループによる話し合い活動では、前半グループで話合った結果を、後半グループのメンバーに伝えるといった役割が全員の生徒にあるので、生徒はワークシートの余白にメモをとりながら、熱心に話し合いに参加していた。また、グループでの話し合い活動中に、どのグループ

にも属さず、すべてのグループの話合いを聞きながらアドバイスをして回る生徒が現れ、生徒が主体的にアイデアを出し合う活動へとつながった。さらに、グループで作戦を考え、自分たちだけのオリジナルの取組を促したことにより、「楽譜にはない和音を作り出す」などの取組につながった。

次に、生徒が互いを認め合い自己有用感を高めるために、「応援」「称賛」「感謝」の場面を設定した。「応援」の活動では、自己決定と他者からの肯定的な言葉掛けの吹き出しを工夫したワークシートを使用した（図7）。このワークシートを1つの掲示物にまとめ、教室に掲示し、互いにマークを貼り合う「称賛」の活動を行った。



図7 「応援」のワークシート

「クラスで認め合うマーク」「友達から認められるマーク」「自分自身を認めるマーク」という3種類のマークを設定することで、すべての生徒が認められる場面を設定することができた。さらに、コンクールを振り返って、互いに相手を認め合う「感謝」の手紙を書いた（図8）。生徒が書いた手紙には、「(あなたが) すごいと思った」などの相手への「称賛」の言葉が100%、「(あなたの) おかげで頑張れた。ありがとう」などの「感謝」の言葉が86%記述されていた。



図8 「感謝」のワークシート

また、手紙をもらった生徒からは、授業後に「グランプリがとれたこともうれしかったけど、クラスの役に立てて良かった」といった感想が聞かれた。認め合いを可視化することで、生徒同士の交流が生まれ、生徒の自己有用感を高めることができた。

表2 「チームになろうシート」を活用した学級活動についての生徒の感想

| |
|---|
| <p><話合い活動について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・掲示物を貼っていくと、自分たちで曲を創り上げていく感じがしました。 ・決められたことをやるだけでなく、「自分たちでいろいろ試してもいいんだ。」と思った。 <p><集団決定した作戦に取組んだことについて></p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌を歌うといつもどきが痛くなります。でも、それくらい頑張れば、クラスに貢献できているのかなと思います。 ・私達も心をつなげて合唱の練習に取組みたいと思った。人に任せるのではなく、皆で歌えば、金賞間違いなしです。 <p><認め合い活動について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなにメダル（自分を認めるマーク）とトロフィー（友達を認めるマーク）を貼った。クラスが団結できた感じがした。 |
|---|

(2) いじめ未然防止に向けた授業から

「チームになろうシート」を活用した、生徒が「自分たちに合った実現不可能ないじめ未然防止方法」を考える授業では、「いじめられる人だけではなく、いじめる人の話を聞く。おそらく何かいらだちがあるだろうから」といった意見が出された。いじめの「被害者」だけでなく、「加害者」についても、「相談者」が必要であることに、生徒自らが気付くことができた。また、「人の良い所を見つける」というものもあった（図9）。これは、本研究の主題に関係するもので、生徒自身の中からこの言葉が出てきたことは、大変意味があることだと考える。

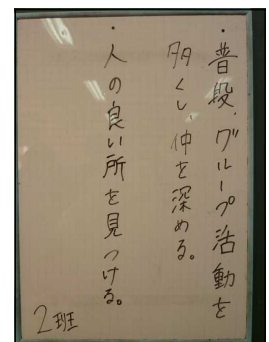


図9 生徒の意見

(3) アンケート調査から

5月と11月のアンケート調査（全校）を比べてみると、「人の役に立っていると思うか」という質問に対し、「非常にそう思う」「わりにそう思う」「どちらかと言えば思う」と、肯定的な回答をした割合が、55.1%から78.0%に（+22.9%）増加した（図10）。これは、「応援」「称賛」「感謝」の言葉など、相手を認める言葉を互いに掛け合い、自分が集団の一員であるという意識が高まり自分が人の役に立っているという感情をより強く感じられたからだと考える。

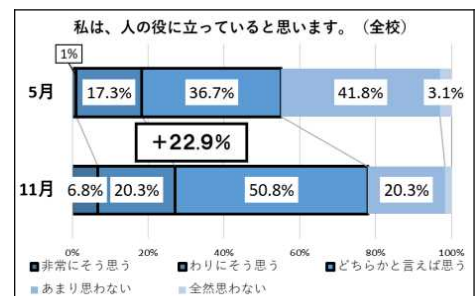


図10 生徒の自己有用感の変容

また、「人の役に立ちたいと思っているか」という質問に対し、「非常にそう思う」は36.7%から46.0%に(+9.3%)、「わりにそう思う」は32.7%から36.5%に(+3.8%)増加した(図11)。これは、自己決定や集団決定の場面を意識的に設け、互いを認め合う場を設定し、友達から肯定的な言葉を掛けられた結果、自己を肯定的に捉えることができ、より積極的に他者貢献しようという生徒の意識が高まったからだと考える。

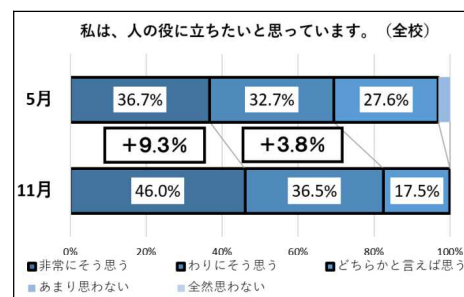


図11 生徒の他者貢献意識の変容

さらに、2学期を振り返ってのアンケート調査には、「みんなで感謝し合うことができた。みんなの役に立ててうれしかった」といった、自己有用感の高まりが感じられるコメントも見られた。

(4) 教師の感想から

「自己有用感パワーアップガイド」について、教職員からは、「ワークシートに沿って、認め合い活動をスムーズに設定することができ、生徒が人の役に立つ喜びを実感することができた」などの感想を聞くことができた。

以上(1)～(4)から、学級活動における「自己有用感パワーアップガイド」の活用と、「生徒による主体的な活動」「認め合い活動」の実践は、「生徒が互いのよさを認め合い、自己有用感を高める」ための有効な手立てになったと考える。

VI 研究のまとめ

1 成果

- 校内研修において、「自己有用感パワーアップガイド」を活用し、「自己有用感」や「認め合う場の設定」の重要性について、教職員の共通理解を図ったことにより、生徒の「互いのよさを認め合う場」を意図的に設定しようとする教職員の意識が高まった。
- 学級活動において、「自己有用感パワーアップガイド」を活用し、「生徒による主体的な活動」と「認め合い活動」を実践したことにより、生徒は、「応援・称賛・感謝」の場面で、人の役に立つ喜びを実感でき、自己有用感を高めることができた。

2 課題

- 「自己有用感」について、より計画的な指導や検証を進めるために、ポートフォリオ形式のワークシートを活用し、生徒が継続的に自己評価をできるような工夫が必要である。
- 本研究では、「自己有用感」を検証するために、「他者貢献意識」と「他者からの受容感」を検証項目とした。今後は、「他者と関わる力」や「学級での受容感」と「自己有用感」との関係性についても、研究を重ねていく必要がある。

VII 提言

- 自己有用感を育てていくためには、一定期間だけではなく継続的な取組が必要である。今後もこのような活動を続け、生徒が主体的に「互いのよさを認め合う場」を作り出すことによって、学校のあらゆる活動の中で、生徒の自己有用感が高まり、生徒の「絆」づくりも深まると考える。

<参考文献>

- ・文部科学省 『生徒指導提要』(2010)
- ・国立教育政策研究所 『生徒指導リーフ Leaf.2 Leaf.6 Leaf.8 Leaf.9 Leaf.18 』

<担当指導主事>

柴山 和宏 西田 麻規